

平成 23 年度 大阪大学入学式 総長告辞

まず、本日ここに集われた 3555 名の学部生、2972 名の大学院生のみなさん、入学ならびに進学おめでとうございます。また、ご臨席いただいたご家族のみなさまにも心よりお祝い申し上げます。

入学あるいは進学の前準備をするなかで、みなさんも、そしてみなさんを迎えるわたしたちも、ともに東北の地を襲った途方もなく大きな災害に直面しました。桜はいつもの春のように美しく、のびやかに花を開いていますが、わたしたちの心は、被害のさらなる拡大に、まだ固く緊張したままです。

被災地では、家族の安否が未だ確認できていない方々がおられます。深い喪失感のなかで、それでも家族や仲間とともに生き延びるために、温かい食べ物と移動のための燃料と、最低限のあたりまえの生活ができる空間とを緊急に必要としている人たちがいます。その支援のために、昼夜身を砕いている人たちがいます。原子力発電所のある地域では、被害をこれ以上拡大しないために、すでに長い期間、きわめて危険な作業にあたりつづけている方々がおられます。そのほかにも、先が見えないまま、まずは身を支えるため、他の人たちを支えるために奮闘している無数の方々がおられます。

被災地から遠く離れた地域では、被災地から届けられる情報に、ときにうろたえもしながら、固唾を呑んで耳をそばだてるという状態が続いています。遠隔地から物資を、義援金を現地へ送るだけでなく、一時も早く、どんなことでもいい、被災地へこのじぶんにできることをしに行きたいと、じりじりしている若者がたくさんいます。復興への道は途方もなく長いです。そのために、復興をどのような方針のなかで進めるべきかについて、被災された方々の身になって、あるいはここまで被害を大きくしてしまったこの国のあり方について、根本のところから考えなおそうと、動きだしている人もいます。

そしてなにより、ここに集われたみなさんのなかには、彼の地にあって被災し、いままご家族が同朋の救援や復旧の作業にあたっておられ、故郷のことがおそらくは一時も頭を離れないまま、ひとり遠く離れたこの西の地で新しい生活を始められた人がいます。またこのなかには、これを機に、かつて幼児のときに体験した阪神・淡路大地震での被災の悲しい記憶が断続的に蘇り、それがやがて度を増し、辛い思いをしている人もきっとおられるでしょう。それぞれの場所で、それぞれの人が、つらい春、きびしい春を迎えています。

そういうつらい時、きびしい時に、みなさんは大学に入ってこられました。さらに遡って言うならば、みなさんは、明治期以降 120 年ほど経って、この国ではじめて、右肩上がりの経済ベクトルが折れ曲がり、長期的な不況の時期に入った時代に生まれ、育てられました。「明日はきっと今日よりよくなる」という経験を一度もしたことがない世代の出現です。就職難という実情、あるいは将来の福祉社会のあり方などに思いを巡らせ、むしろ「明日は今日よりもっとひどくなるかもしれない」という潜在的な予感をこそ共有しているといっても過言ではありません。そういう社会感覚をもちながら、これまでの社会を牽引してきたいわゆる「成長」という物語、大量生産・大量消費による「豊かな社会」の構築というのとは別の物語を紡ぎだしつつ、それに沿って来るべき社会のあり方を構想していかな

ければならない、そういう世代としてあなたがたはいます。

このたびの震災以前からも、少なからぬ人たちが、わたしたちの社会のそういう課題に立ち向かい始めていました。東日本におけるこのたびの震災は、その復興過程で、いま求められているこうした社会の変化に一気に棹さすことになるでしょう。日々の生存の奥底に溜まっている社会感覚についていえば、これまで社会を牽引してきた人たちとこれからそれを牽引していくであろう人たちとのあいだにはおそらく想像以上に大きな落差があるでしょうが、ともに抱えている課題はおなじです。あらゆる世代が力を合わせてこの変化に確実に対応しなければなりません。

「幸福な生活」とは何か。だれもがいきいきと暮らせ、だれもが満ち足りた思いのなかで穏やかに死んでいける社会とは、いったいどのようなものか。社会のグラウンドデザインを描きかえるにあたっては、この問いが根底になければなりません。これを基礎として、あるべき社会を構想しなければなりません。なぜでしょうか？

人間の行為はみな幸福をめざしているという点については、だれにも異論はないと思います。が、いざこの幸福が何であるかということになると、意見はばらばらに分かれます。快樂だ、名誉だ、富だ、というふうにです。けれども、快樂や名誉や富、さらにはそれらを手に入れるための知恵や技能は、幸福になるためには望ましいものですが、その逆はありえません。つまり、快樂や名誉や富、知恵や技能を手に入れるために幸福になるということはありません。そういう意味で、アリストテレスは幸福を「自足した善」と呼びました。「いかなる場合にもけっして他のもののために追及されることのないもの」、「つねにそれ自体として望ましく、けっして他のもののゆえに望ましくあることのないようなもの」、それが幸福であるとしました。

「幸福とは何か？」 この問いは、逆説的にも、失ったものの大きさに比例して深まっています。あるいは、他者が失ったものへの想像力の密度に比例して、深まっています。

そういう意味で、みなさんにいつも持ち合わせてほしいのは、この《他者への想像力》です。明治期の終わり、1911年に大阪毎日新聞慈善団が発足した折り、当時の毎日新聞社長であった本山彦一さんが語ったこんな言葉を思い出します。「一本の指のうずきは、同時に、全身の苦痛である。社会の一隅に、生活に疲れ、病に苦しむ者の存することは、すなわち、社会全体の悩みでなければならない」と、本山さんは人びとに語りかけました。《他者への想像力》とは、ふつう思いやりと言われますが、要するに他者を他者のほうから理解しようとすることです。その意味では、想像力とは、じぶんが抱えているイメージをさらに広げることではなく、じぶんをここではなく別の場所から見る力のことだと言うべきです。

そのように考えると、他者への思いやりは、みなさんがこれから取り組むことになる学問や科学のいとなみと、じつは底を通じていることがわかります。

大学において真理の探究という仕事に就くことと、一市民として他の苦しんでいる人びとを思いやるということとは、想像力のいとなみであるという点で、異なる二つのことではないのです。想像力とは、いまここにはないもの、不在のものへと向かう心の動きのことです。まず、思いやりとは、じぶんでは体験しようのない他人のこころの内を想像するい

となみです。次に、科学研究とは、眼の前で起こっている出来事がどんな見えない規則や構造によってそのように起こっているかを論理的に突きつめる作業のことです。そして宗教もまた、この世をここではなく、向こう側（あの世という〈外〉）から捉えなおそうとするいとなみであると言えるでしょう。それに、見えないけれど大事なものをキャッチし、形を与える芸術、さらには空想やファンタジーまで含めると、想像力とはわたしたちの文化をかたちづくるもっとも基礎的な力であることが見えてきます。

自然や社会の出来事を、そうした出来事を引き起こしている見えない構造のほうから突きとめようという科学研究の姿勢と、じぶんでは体験しようのない他人のこころの内を思いやろうとする対人関係の態度とは、このように、視点をいったん自分のここという場所から外して、出来事の側に、あるいは他者の側に置くという意味では、じつはおなじ性質のものなのです。そしてその意味で、ほんとうの科学は思いやりのあるものであるはずなのです。

この世界を見るわたしたちの視野というのはけっして広くありません。いつもここから、じぶんの立っているこの場所からしか見られないという限界がまずあります。次に、じぶんが教わってきた知識や習慣の枠のなかでしか見られないという限界があります。加えてさらに、じぶんがなじんでいる言語のなかでしか考えられないという限界もあります。こういう世界は、リアルと言うにはまだまだ小さいものです。世界を的確に掴むには、そしてそこからさらに大きな夢を紡ぎだしてゆくためには、この小さな世界の襞をもっと大きく広げていかななくてはなりません。想像力によって、です。

学問というのはそのためにあります。世界についての視野を広げていくのです。視野を広げるといえるのは、すでに知っている知識を量的に拡大するというではありません。そうではなくて、これまでそんなものがあることさえ知らなかった「ものの見方、問い方、考え方」にふれるということなのです。そうして、じぶんがいま立っている状況、じぶんが封じ込められているように感じている状況を、じぶんから離れたところから客観的に見つけ、それを的確に理解する力をしっかり養うということなのです。

みなさんにはこれから、このような科学の精神をこそ身につけ、人びとから「厚い信頼」を寄せられる社会人・研究者となっていきたいと、わたしは強く願っています。

さて、大阪大学はことし、創立 80 周年の記念すべき年を迎えます。この創立記念行事の精神を、わたしたちは「原点へ、未来へ」と名づけました。大阪大学の原点、それは何かと言いますと、18 世紀、19 世紀の江戸期に大坂の町に開かれた民間の二つの私塾、懐徳堂と適塾のことです。大阪大学は 1931 年に医学部と理学部からなる国内で第 6 番目の帝国大学として創立されました。が、京都という近くにすでに帝国大学が設置されていたので、国はさらなる設置に積極的ではなく、大阪の自治体や民間人が強く設置の嘆願をし、さらに創立の準備金や当座の運営資金を民間でもつとということで設置が認められました。これが、大阪大学が国立大学としてはめずらしく（各藩の）藩校ではなく、民間の私塾を源流としている理由です。

懐徳堂は、1724 年、享保 9 年に、大坂の 5 人の商人によって設立された学問所です。民間人のセルフ・ラーニングのための学校で、いったん学舎に入れば武士も番頭も丁稚も同

列の扱いがなされました。授業料は年五回、銀一匁もしくは二匁、金がなければ筆一對、紙一折でもよいというふうに、町人の懐事情に応じて設定されていました。ここで町人たちが学んだのは、けっして日頃の仕事に役立つ経営学のようなものではなく、もっとも基礎的な科学であり、中国の古典に依拠した道德の基本というものでした。商業の基本は「信用」にあり、「信用」の根拠をしっかりと掴むために、ものの道理とひとの倫理を学ぼうとしたのです。

適塾は、1838年、天保9年に、ひとりの医学者、緒方洪庵によって開かれました。幕府教学の総本山ともいべき昌平黉とそれに連なる藩校とはまったく異なる私塾としてです。この適塾は、明治の言論人、福澤諭吉や、日本近代の軍隊制度を確立した大村益次郎、日本赤十字を創設した佐野常民、そのほか日本の殖産興業を牽引した大鳥圭介ら、明治期の日本のリーダーたちを数多く輩出しました。緒方洪庵自身も、のちに江戸幕府奥医師ならびに西洋学問所頭取を務め、その地で亡くなりましたが、明治に入り、これを基盤に東京大学医学部の前身である東京医学校が設立されました。また、適塾の塾頭であった福澤諭吉が江戸に開いた洋学塾が、のちに慶應義塾に発展します。そして大阪大学医学部は、適塾を基盤として創設された府立大阪医学校の流れを汲んでいます。その意味で、適塾は、わが国において制度化された近代的な大学と医学部の源流でもあったのです。

福澤諭吉が描いている適塾の生活の一端を紹介しますと、福澤の描く適塾生の気概とは、次のようなものでした。

[われらが適塾生は]前途自分の身体はどうなるであろうかと考えたこともなければ、名を求める気もない。……ただ昼夜苦しんでむつかしい原書を読んで面白がっているようなもので、実の訳のわからぬ身の有様とは申しながら、一歩進めて当時の書生の心の底を叩いてみれば、おのずから楽しみがある。これを一言すれば一西洋日進の書を読むことは日本国中の人にできないことだ、自分たちの仲間に限ってこんなことができる、貧乏をしても難渋をしても、粗衣粗食、一見見る影もない貧書生でありながら、知力思想の活発高尚なることは王侯貴人も眼下に見下すという気位で、ただむつかしければ面白い、苦中有楽、苦即楽という境遇であったと思われる。(中略)とにかく当時緒方の書生は、十中の七、八、目的なしに苦学した者であるが、その目的のなかったのが却って仕合わせで、江戸の書生よりも能く勉強ができたのであろう。それから考えてみると、今日の書生にしても余り学問を勉強すると同時に始終我が身の行く先ばかり考えているようでは、修業はできなからうと思う。

(『福翁自伝』より)

「目的なしに苦学する」ということ、ここに誇りがあり、また適塾の教育の固有性があります。明日のニーズに応えるための学問ではなく、「我が身の行く先ばかり考える」勉学でもなく、明後日の未だ見えぬ社会を建設するためにいま力をたつぷり蓄えておく、そんな大きな気概が適塾の若者たちには満ちていました。そんな塾生は、もちろん地方に帰って医学者、医療従事者になった者も数多くいましたが、それ以上に数多くが、明治期日本社会のリーダーに育っていきました。適塾ではオランダ語と医学の二科目しか教えません

でしたが、一見今日、明日に必要なことを教えるかに見えるこの二科目をつうじて、なぜこれらの優れた人材を生み出すことができたのか、その教育のあり方に大阪大学はいまも多くを学ぼうとしています。その秘密は、直近のニーズに振り回されることなく、この世界を、いま立っているのとは別の場所から見ることのできる、そのような眼を養うところにあり、そのことをつうじてじぶん自身をおおらかに、のびやかに開いてゆくことにあったと考えています。

かつて旧制高校には、将来、医者になったり、法律家になったり、エンジニアになったり、外国文学者になったりする人たちが机を並べ、起居を共にして、同じような書物を読み、共通の論題について議論を交わすというシステムがありました。ある年配の経済人は、このネットワークが大事で、じっさい《「この仕事はあいつに頼もう」「これについてはあいつが詳しい」というネットワークがしぶとく生きていて、「だれに頼めばいいかを知っていた」。これはきわめて精度の高い情報だった》と、わたしに語ってくださったことがあります。みなさんの眼は、こうした関心を異にする友人たちとの交友のなかでも磨かれるのです。

大学ではじぶんの関心、じぶんの専門領域とは異なる領域の人と交わり、この世界、この社会、そしてじぶん自身を見るたしかな眼を育ててもらいたいと思います。そして「あいつは頼れる、信用できる」と言われるような、ほんとうのプロへと育ててもらいたいと思います。このことを強く念じて、わたくしからの告辞とさせていただきます。